

Title	亞細亞古石器時代人と漢民族との縁故關係
Sub Title	
Author	長谷部, 言人(Hasebe, Kotondo)
Publisher	三田史学会
Publication year	1948
Jtitle	史学 Vol.23, No.2 (1948. 6) ,p.1(137)- 20(166)
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	特輯東亞文明の始源
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00100104-19480600-0001

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

亞細亞古石器時代人と漢民族との縁故關係

長谷部言人

序言

昭和四年（民國十六年、一九二九年）、冬至に近くわけて日の短い十二月二日の午後四時ごろ、新生代研究室の周口店發掘第三年度作業終了の寸前に、下洞 Lower Cave の一隅、さきに下齶の付いた完全な犀の頭骨が出たあたりで一心に作業中の現場主任裴文中氏は遂に半ば砂に、半ば硬い母土に埋もれた人類頭骨外面の一部を探りあてた。これまで遊離した齒、下齶骨の破片が數個出ただけで、これらにシナントロプス・ペキネンジス *Sinanthropus pekinensis* Black-Zdansky と大袈裟な名前がつけられていたが、頭骨の發見はこれが最初である。當時仙臺在勤中の私も翌春この頭骨に就いての豫報の惠贈をうけて、覺えず瞠目した位だから、裴氏の歡喜、ブラック氏 Davidson Black の興奮につゞく活躍のほどが今も偲ばれる。爾來重要な發見に關

して北平新生代研究室關係諸學者は多くの有益な研究報告を發表した。その大要に就いては幾たびか紹介したことでもあり、今更事新しく之を繰返すのは好ましくない。併し特に北京人類に關する論考を掲載したいという本誌編輯係の申入れを否みかねたので、これに關する知見の大要と共にピテカントロプス、ホモ・ソロエンジス、山頂洞人など、主な亞細亞の古石器時代人から新石器時代を経て、漢民族に至る一脉の縁故に就いて甚だ蕪雜未熟な私見を述べて責を塞ぐことにした。

シナントロプス・ペキネンジスの漢譯は北京種支人類、俗に Peking-Man 北京人類と呼ばれるが、北京の西南三七哩の周口店龍骨山を出土地とし、西山連峯のつゞきというほかに、直接北京に關係はなく、この發掘事業の計畫と研究の中心地がそこにあつたというだけである。周口店は京漢線琉璃河驛から分岐する短い支線の終點で、驛の西南

方山麓一帯は奥陶期石灰岩層から成り、同線敷設當時はこの石灰石及び石灰と西北方の長溝峪に産する石炭の出荷地として賑わつたが、今は衰微の態である。この石灰岩層の諸處に大小の洞穴、罅裂が多數あり、これに充填せる堆積土は動物の骨化石を夥しく包含する。石灰岩採掘者にとつて厄介な存在だが、これに太古人類の探查研究上の重要資料が含まれていることがある。このことは我國の石灰岩採掘業者にも諒解されるようにしていただきたい。東大人類學教室ではかゝる獸骨化石發見の報告に斷えず注意を拂い、待機している。

シナントロプス頭骨は上記化石堆積の一から出土したが、偶然の發見とちがい、計畫的な探索の結果で、その端緒を開いたのは黃土地帯の先史學研究の權威アンダーソン氏 G. Anderson である。氏は大正七年龍骨山南方二軒餘の俗稱鷄骨山で柱狀に掘り残された化石堆積を探り、同十年再び同處を訪れたとき、採掘人から驛の西方にある小丘俗稱龍骨山の北面にも斯る堆積があると聞いて、そこを視察した。龍骨山北側の低地老牛溝通行中氏の注目を惹いたのは此附近にある筈のない白色石英片の散在である。恐らく原始人類がもつて來たのだろう。それを探そうではないかということになり、同行の一人ツダンスキー氏 Otto Zdansky 氏が數日居残つて、この堆積の露出部を探り、翌

年も採集に來た。その際類人猿のかと思われた大白齒一個が發見され、後ち瑞典ウプサラ大學に送られた化石の中からも小白齒が一個發見された。大正十五年秋來朝された瑞典皇太子が下總姥山貝塚發掘見學の後、北京を訪問されたとき、同地の諸學會が催した歡迎聯合大會の席上でアンダーソン氏は兩齒發見の事實を傳え、マムムート以前の人類遺殘として意義重大なることを述べて、參會者に深い感銘を與えた。この機會を捉えて、アンダーソン氏採集の各地古人骨を研究していた協和醫學院解剖系のブラック教授が熱心斡旋に努めた末、ロツクフェラー財團援助の下に中國地質調査所と協和醫學院解剖系の協同事業として兩齒の發見された堆積を發掘調査する計畫が急速に具體化し、翌昭和二年四月（一九二七）から發掘が實施され、地質調査所は専ら發掘作業や地形地質、化石等の調査研究、協和醫學院解剖系は人骨の研究を擔當する手筈で、所長丁文江氏が主任に、ブラック氏は企畫指導に當ることになつた。

一 周口店發掘の經過概要

龍骨山は海拔約一五〇米だが、山下の琉璃河の水面が同五〇米で、高さ一〇〇位の小丘である。ツダンスキー氏の人齒を採集した堆積は石灰掘業者が該洞穴の北壁の上部に當る石灰岩を約一五米の高さだけ採掘したところ、これが露

われたので採掘を中止したまゝになつていたのである。堆積の頂きは水面上六〇米位、その横がりは東西約三〇米、南北一五米、別に東方に隣して鴿子堂洞と呼ばれる小洞が開いていた。後者は始め無關係と思われたが、發掘二年目に堆積の後者へつゞくことが明にされた。これに對して主堆積 main depositのある洞穴は猿人洞と呼ばれるようになった。この發掘と同時に附近の洞穴や罅裂も發掘調査されたので、この地點は第一開發處 Locality と名づけられ、他もこれに倣つて番號で呼ばれた。第一地點は始め北側の半分ばかりを西部から始めて層々發掘されたが、十月十六日始めて小兒の左下第一大臼齒が發見された。これより先 Zdanovsky 氏はこの採集獸骨に就いて報告し、兩齒の一を Homo sp. の未成熟な下永久小白齒（恐らくは左第三即ち醫學者の謂う第一）、他を右上第二或は第三大白齒として記載したので、ブラック氏は新發見大白齒と後者の小白齒石膏模型を holotype (宗型)、又後者の大白齒を co-type (輔型)として各その特徴を詳記し、シナントロプスと名づける新屬の設定を提唱し、これらの齒を有する種を Sinanthropus pekinensis Black-Zdanovsky と命名した。即ち此名稱は頭骨發見の二年前に撰まれたのである。ツダンスキ氏が齒を採集した場所は後に Locus A、新に小兒小白齒の出たところは Locus B と名づけられ、以後人骨の發

見される毎に其場所が C、D……區と名づけられた。後ち昭和九年から發掘方法が改善され、東西及び南北方向に白線をひいて堆積の上面を方二米に區劃し、又深さ一米毎に掘り進んだ。人骨の出たときはその區劃に Locus A、B、C……と命名し、人骨そのものをこれに準じて ABC……と呼び、二個體分以上の骨が出たときは LI LII LIII の例のように呼んで區別された。即ちツダンスキ發見の齒を有する個體は AI AII、新に發見された齒は BI と稱せられたのである。周口店發掘には學ぶべきものが多い。例えばすべての骨片や石片にはいつ、どこの區劃から出たとわかるように、一々記號が書かれている。前記區劃は東端から西端へ順次に ABC……、南北には昭和二年發掘を開始した列を O として北へ 1 2 3……、南へ -1 -2 -3……とし、その組合せで AI L-2 などとして表はされ、これに發掘の年次と、その年の發掘第何日目かを示す數字とが附記される。別に臺帳があつてこれに記載があるから、標本毎に一切の發掘の日や層位等がわかるようになつている。我國では小規模の發掘に狎れて兎角斯る注意が届かない。今後この例を參考して適宜工夫改良されるよう囑望し、特にくどく書いたわけである。第一地點發掘第二年に AB 兩區より更に若干の遊離齒と下齶が出た。翌春ブラック氏はこれらの下齶骨に就いて報告したが、ハイデルベルヒ及びピルトダウンを除いて前期

最新世人類下齶骨の発見は當時この以外にはなかつたのである。兩年度に發掘された體積は六〇〇〇立方米、採集化石は一千箱に及んだが、人骨の收穫は多くなかつた。本堆積を更に深く且つ廣く掘り、他の地點を發掘調査する必要もある。そこで更めて地質調査所に新生代研究室を附設し發掘を持續して目的の完遂を期することになつた。第三年には外壁の西部よりあつた罅裂を少しく東西に擴げ、先づ此部を掘下げて洞底を探ろうとしたが、その主洞によつた部分では堆積頂下二〇米で大岩塊に逢着したので、これを避けてその北方の分を掘下げた。この部分は下溝 *Lower Fissure* と名づけられ、四二米の深さで漸く底に近づくことが察せられた。此下溝の南端には二の小洞が現われたが、其東南に向つて水平に擴がつている方の小洞が所謂下洞 *Lower Cave* である。十一月二日に頭骨が發見されたのである。これはE區 *Loeus E* と名づけられた。

第四年昭和五年五月地質調査所は龍骨山を買収して、下洞の發掘を繼續し、晩秋E區より一下齶骨を發見した。一方主洞の南界を明にする爲め上部及南部の碎岩作業が行われた。

昭和六年には下洞の發掘を打切り、鴫子堂洞に轉じ、其洞底を西に向つて開掘し、主洞深部の土石の搬出路に供する計畫であつたが、深さ八米で紅土に黒色土を混じ、骨破

片、石英破片、焼けた獸骨等を交える層があらわれた。更に掘下げること五米でまたもや石英片等が無數にあらわれGI GII 下齶骨、鎖骨及び頭骨破片などもあつた。前者は第一石英層 *Quartz Horizon I*、後者は第二石英層 *Quartz Horizon II* 又C文化帶 *Cultural Zone C* と名づけられた。前記黒色土は分析の結果多量の炭素を含むことが確められブラック氏によりシナントロプスが火を用いた證跡として報告された。又當初は石器などの存在を念頭にすることなく、只管化石を目がけて發掘していたが、第一石英層に逢着してからこれに注意を拂うようになった。第二石英層の加工した形跡のある石英破片は同年周口店を訪れた斯道の權威ブレイ氏 *Henri Breuil* により石器なることが肯定された。

昭和七年は第一地點南方の傾斜面の探查等に費された。此年滿洲事變勃發し、本發掘事業の進行にも困難を加へたと云うことである。昭和八年には主として山頂洞の發掘調査が行われた。翌九年には前々年組織的發掘の練習などもやつたので、いざ第一地點主洞の本格的發掘に着手しようという矢先、三月十五日ブラック氏は研究室の机にもたれた儘急死した。併し發掘は豫定の如く遂行され、從來は堆積の北半だけであつたのを、東西半共全部下底に至るまで層々掘り下げることになつた。翌昭和十年ブラック氏の後

任としてワイデンライヒ氏 Franz Weidenreich が招聘され、専ら人骨の研究に當り、爾來多くの業績を發表した。堆積の頂より二〇米掘下げるまでは格別の發見物はなかつたが、次の第二層 Level 21 はシナントロプス C の出土した下溝の 2 層に當り、その頃からつぎつぎ重要な發見があつた。即ち昭和十一年十一月には L 區で一舉に三個の顔面の一部をさえ存する保存良好な頭骨、同十二年 J 區から大腿骨破片及び上膊骨各一個、M 區からも大腿骨破片、N 及び O 區から齒若干等が出た。四肢骨の發見は甚だ稀れであり、重要な意義を有するものである。然るに此年七月七日蘆溝橋事件突發し、十一ヶ年に亘る功績偉大な文化事業は既に其終末に近づいていながら中絶の已むなきに至つた。ワイデンライヒ氏は尙研究をつづけたが、石膏模型製作の業一段落を見るや、十五年米國に引上げた。昭和十六年十二月八日早曉攻撃開始にあたり、畏友榑野北支派遣軍軍醫部長は貴重な北京人類標本の失われる危険あるを憂慮し、特に自ら部隊に先だちて、豫て見知りたる保存個所を臨檢したが、庫中既に空しく、爾來杳として其行衛全く不明だということである。併しワイデンライヒ氏がシナントロプス及び山頂洞人頭骨の研究記録を保有する限り、氏によつて其詳細を剩すところなく知り得るときのあることだけは確實である。戦時中龍骨山の遺跡には小部隊が駐屯し

警備の傍ら遺跡保護に當つていた。これも榑野氏の配慮によるのである。氏はフイリッピンに轉じた後ちバンドンに赴いた序でに地質調査所を訪ね、ジャワ出土頭骨の行衛不明となつたものゝあるを聞いて、深く之を憂慮し、書を寄せてその所在の探知方を依頼されたこともある。孰れも氏の誠意が徹底するに至らなかつたのは遺憾である。北京人類及山頂洞人骨の一日も早く無事協和醫學院解剖系に復歸を見ることは吾々の衷心より祈つてやまないところである。

二 周口店諸地點堆積の地質年代

大正五年中國實業部鑛業顧問に聘せられたアンダーソン氏を始め、ツダンスキ、テトララー、楊鐘健、バルボア氏等中國地質調査所に關係した諸學者の黄河及汾河沿岸に於ける侵蝕並びにこれにつゞく砂土堆積の地層、地形及び古生物學研究により、華北地方の後期新生代には少くとも次の五期が分けられることが明になつた。

侵蝕期 ダンチエン	堆積期 パオテ	華北地質年代	地質年代
唐縣期	保德期	蓬蒂紀 ポンチエン	初期
無名期 フニホ	無名期	三門系 サンメン	中期
汾河期	三門期	三門系	後期
無名期 チンヒ	周口店期 チヨウコウテン	周口店時期	最新世
清水期	馬蘭期 マラン	黃土時期	初期
			後期

第一乃至第五期の堆積砂土は暗紅乃至紅色で、時代を遡るに従て色が濃い。第五期はこれとちがつて砂性を帯び、稍黄色である。兩層とも其下底には礫堆積がある。これらの堆積は孰れも河段上に見られるが、周口店には會々罅裂堆積に顯著な例があつたので、其諸地點が指標にされている。華北に於けるポンチアン以後の後期新生代哺乳動物群は大體ウイラフランシアン Villafanchian シナントロプス、及びレンシク Loessic の三群に分けられる。このうちウイラフランシアン群は歐羅巴の Villa Francha d'Asi, Val d'Arno 及び Perriers の、又シナントロプス群は Mauer, Abbeville 及び Cromer などの哺乳動物群に似ている。ポンチアン群が現生とは屬をも異にするに反し、以後は概ね後者と屬を同じうする。但しウイラフランシアンには種を異にするものが多く、周口店以後には種の同じものが多し。周口店でウイラフランシアンに當るのは第十二地點だが、北京西郊の門頭溝附近の灰峪で新生代研究室の發掘調査した第十八地點はその代表的なものである。

一八五六年ネアンデルタールに於ける發見以來歐羅巴其他各地で出土した最新世人類の頭骨及び其他諸骨は既に甚だ多數に上つている。併しその前期に屬し、原始的な性狀を有するは、周口店發掘まではピテカントロプス以外にな

く、マウエルの下齶骨即ちホモ・ハイデルベンゲンジスでも前期には遡らないとされてきた。ピテカントロプスとしては一八九〇年ケズンブルクスで下顎骨、翌年トリニルで大臼齒一個と頭骨更にその翌年大腿骨が發見され、以後はデニボア歸國して、他人が採集し、又近年の追加發見例も採集者任せで、中には表面採集と云つてよいものもあつた。これに反してシナントロプスにあつてはその出土地は只一個處であつても、秩序ある發掘によつて多數の骨と共に夥しい數量及び種類の獸骨化石が採集された上に、至近距離にある他の多くの地點の堆積が發掘され、これ亦多種多量の獸骨化石の出土を見た。これらの獸骨化石はテラー師 P. Teilhard de Chardin 楊鐘健、裴文中氏等之れを比較研究し、これによつてシナントロプスの棲息した地質年代の推定に一層確實性が加えられた。

第二以下諸地點中第十四地點は龍骨山の頂よりも高く、海拔一七〇米にあつた長さ七、幅二一メートルの凹陥で、薄き表土及び紅土で蔽われた硬い帶黄色粘土を充填し、これより三五〇個體の魚化石が採集された。殆んどすべて鯉科に屬し、現生種は僅に六分の一、他は絶滅種である。これは鮮新世後期に屬するものと推定された。第十二地點は第一地點の南三〇〇米にある第三地點の附近で發見された徑一米の垂直に下行する管狀罅裂で、その堆積礫土中にはアナグ

マ、ヒ、ザル及びヒ、ザルか或はマカダスかと思はれるもの各一種の化石遺残あり、ウイラフランシアン即ち鮮新世後期と認められる。龍骨山の最高頂のキャップと名づけられた堆積は蝙蝠類の化石を多く包含し、これより根の如く垂直に下行する管状罅隙中につづいていゝる。前者よりは古い、鮮新世中期に遡ることはいらしいと云われる。尙これと略ぼ同じ高さの山上諸處には暗紅土で蔽われた河礫層がある。Upper Gravel (上礫層) と呼ばれ、ポンチア即ち鮮新世前期の河段に當るものである。これに對して龍骨山下の諸處には琉璃河水上約八米(海面上約五〇米)に紅土に蔽われた厚い河礫層の堆積がある。Lower Gravel (下礫層) と呼ばれ、周口店期即最新世前期に屬する河段に當るものである。第一地點主堆積の下底はまだ究められないが、下溝 Lower Fissure の發掘は既にその下底に近づき、尙少しく掘り下げれば下礫層に吻合するものと思われた。前記第十四、第十二地點及びキャップを除いた他の諸地點は兩礫層の間に位して最新世に屬し、包含化石獸骨に就いての所見もこれに一致する。併し各地點出土資料を夫々比較考察すると、包含獸種に稍著しき差異が認められ、堆積時代を異にすることが明である。即ち第十三及び九地點は最新世前期に屬するが、第一地點はこれより後れて、同じく前期でも中期に近きこと略ぼ確實である。第

十三及び九地點に見られる *Siphneus tingi*, *Hystrix lagrelli*, *Euryceros fabelatus*, *Hydropotes inermis*, *Machairodus ultimus* 等が第一地點の饒多な化石獸骨中には見出されず、同屬の近似種がこれに代り、後者は前記兩地點からは檢出されなかつたからである。

又第三、四及び十五地點は第一地點よりは後れ、最新世中期に屬することが略ぼ確實である。例へば第一地點にある *Nyctereutes sinensis*, *Euryceros pachyosteus*, *Pseudo-axis gravi*, *Equus sammienensis* 等は第三地點にはなく、その代りに同屬の近似種が見られる。尙シナントロプス遺跡のほか、第十三、第十五及び第四地點から僅少の石器らしきものが採集された。第十五地點に就いては今後の發掘に期待すべきものが多いようである。

尙第一地點の南界に接する山頂洞にはシナントロプス層より紛れこんだらしい犀と熊とを除いて、四十七種の獸骨があつた。特に多いのは虎、兎及び北京鹿で、數千或は數百頭分が數えられた。虎が此地方に現棲しないのは人類に狩り盡された結果かと思われる。ヒエナ、洞熊、象、駝鳥があつたことは山頂洞堆積が最新世に屬することを肯定させる。洽爾賓近くの願郷屯はこれと略同期と認められるが、山頂洞と異つて北方系獸種が多く、南方系の種類が少い。オールドスのシャラ・オソゴルの化石獸骨にはナマヂクス象

や毛犀其他絶滅種が多く、山頂洞堆積よりは古い時代に當るらしい。

シナントロプス遺跡出土獸骨の主なものには翁氏大田鼠、中國狸、中國ヒエナ、劍齒虎、メルク犀、毛犀、三門馬、硬骨鹿、ナマデクス象等で、疑もなく前期最新世に屬することを示し、且つ上記所見により第十三及九地點に比して同期末に近きことが推定されるのである。

三 シナントロプス遺跡の層位關係

第一地點の主堆積にはその上部に大小の石灰岩塊が横わり、洞穴頂蓋の墜落崩壊し去つた形跡歴然として存し、凡そ次の十層より成り、各層は東南より西北に向つて少しく傾斜している。

	厚さ(概略)
1 淡黄色土層	一、二〇米
2 灰色砂性土層	一、七五
3 石灰岩盤塊層	七、二五
4 砂性紅土層	六、七〇
5 シナントロプス層	〇、四〇
6 石灰岩碎礫層	六、〇〇
7 砂層	一、五〇
8 石灰岩碎礫砂土層	五、〇〇

9 同混砂層 二、〇〇

10 砂性紅土層 二、〇〇

上記のうち1 2には石灰岩小片を交え、化石獸骨破片はあるが小さい。3は主として洞穴頂蓋の落盤より成るものである。4には黒色を帯びた部分あり、齧齒類及びその他の小動物の骨がある。5は即ちAB下齧骨破片、遊離齒の在つた層で、化石獸骨多く、砂土黒色を帯びている。6の上面は固き床狀を呈し、此層にも獸骨化石が稍多く含まれる。7には石灰岩片及び河礫若干あり、獸骨甚だ多く保存良好で、シナントロプス骨はない。洞棲獸に占められていた頃の堆積である。8 9には石灰岩片はあるが、小さく、獸骨が少い。シナントロプスの棲息した時期である。10に至れば兩者共なく、凝結物が多い。

尙下溝北部堆積は右の7 8 9 10に相當し、次の四層が認められた。

	厚さ
α 食肉類層	一、五〇米
β 齧齒類層	三、〇〇
γ 紅土層	一、五〇
δ 砂性紅土層	二、〇〇

右のうちαは綠色砂土より成り、石灰岩小片あり、完全な獸骨が多い。シナントロプスC下齧骨及び遊離齒の出土

のは此層である。βは紅土より成り、碎礫稍多く、獸骨も多い。γにも獸骨は多いが、碎礫は少い。シナントロプスD頭骨破片はこの層から出た。δには不整な凝固物あり獸骨がない。以上は昭和六年下洞の發掘を打切つたころまでの所見であるが、昭和十一年から一米毎の深さで區切つて發掘が進められることになり、主として第二十一層Level 21以下がこの方法で探られた。LI LII LIII頭骨の出たのは第二十五層で、C文化層と同じ8層に當り、γは9層に當るようである。前述の如く89層はシナントロプスが本洞穴に占居した期間にできた堆積と認められる。

前記45には多量の炭末や原始石器を含みabc三亞層に分れた上灰層一名A文化層があつた。又鴿子堂洞のB文化層、一名第一石英層及びその下方約五米にあつたC文化層、一名第二石英層は8、9に相當する。

4567層の獸骨には何等の差別が認められないということである。

四 シナントロプスの文化遺物

第一地點發掘の當初には殆んど文化遺物に注意されなかつた。包含量が少なかつたからでもある。然るに第四年の秋、鴿子堂洞に近い主洞東端部の作業にかゝつたとき、この4、5層中に灰分に富み、石英破片や焼けた骨の多く

含まれた部分のあることが注意され、A文化層と名づけられた。これには上方から數へてabc三層が見られる。昭和二年ボーリン氏が齒を發見し、その後にも附近から數個の齒や下顎骨が採集されたB區 Locs Bは最上のAa石英層、ツダンスキ氏が齒を採集したA區は最下のAc石英層に當つてゐる。又鴿子堂洞内ではAc石英層より八米程下方に厚さ五〇纏の間に三層から成るB文化層及び後者より四米程下方に厚さ二米位のC文化層が見られた。このC文化層は前記8、9層に相當するらしく、灰及び石器と共にシナントロプス下顎骨、頭骨破片等の他、ヒエナの骨、糞石、馬、メルク犀、廣角鹿、アムモン犀、ナマデクス象、駝鳥卵等あり、又焼けた骨、角、角心、木片や焼けた粘土なども見られた。石器はこれらの文化層以外にも散在した。併し洞底に近すくと、ヒエナや熊などの洞棲獸が多く、人齒に乏しいように見えた。

C文化層は一六〇立方米程發掘され、數千の小石片、第一地點附近以外の地域から持つて來られた石塊の割れたものや、無疵のごろた石百餘個が採集された。後者には綠色砂岩、縞石英が多く、時としてクオートツアイト或はクオート・ポルフィリツツなどもある。小破片は概ね縞石英で、極めて稀に美しい透明な結晶石英などもあつた。チャートは二三片に過ぎない。石灰岩質のものも僅少にある。フリ

ントは極めて稀れである。石英及綠岩塊は山下の河床からひろつて來られたとしても、結晶石英は本洞の北東及び南方若干キロ米にある花崗岩帯から採集されたのである。方に石器と稱すべきものは比較的少く、一五〇個を超えない。石器と云つても、簡單に石塊を撃ち缺いて鋭い縁や嘴の如き尖端或は握るに適した頭端をつくつて、割截 chop 搔爬 scrape 剔抉 scratch に使用したと思はるゝ類で、双縁や尖端を更に細く缺いて修整 retouche を施したと斷定し得られるものはなく、それらしく見えるのは使用によつて生じた缺損のあとと認められる。即ちこれらは所謂原始石器 *colts* に當り、多數の類例を綜合すると、自然に散在せる破片をその儘用いたのでなく、ごろた石や割れた石を拾つて來て、わざわざ打ちかいて作つたと見られるのである。裴文中氏の詳細な説明及び圖示によると、既に形式分化の傾向さえ窺われ、ブレイ *Brail* 氏は石器の非相稱性に注意して、右利であつたろうとさえ述べている。

C文化層の黒色土は化學検査により炭末なることが明にされた。焼けた土もあり、こゝに居住して火を焚いた跡と認められる。獸骨の焦げ、或は灰化したものもある。石器は獸屍を切り割き、骨より肉を殺ぎ、骨を打割するに用いられたのである。獸骨の破摧せるものにはヒエナ、洞熊等が嚙み碎いた牙の痕を有するものゝ他にシナントロプスが

打割したらしいものもある。石器や焚火の跡などの存在はこの洞穴が居住に利用されたことを推定させるが、ブール *Bour* の氏の如くそれはシナントロプスでなく、文化の一段進んだ人類ではなかつたろうかと云う説もある。併しシナントロプス以外の人類がいた證據はない。シナントロプスの頭骨や四肢骨には食人の形跡もある。これも第一地點以外に棲息した群の仕業と見なすのが最適切のようである。第一地點よりは少しく高く、海面上一五〇米にあり、包含化石獸骨から見ても、これより時代の古い第十三地點からは唯一箇ではあるが、石器と思はれるものが檢出され、チャート質及び石英質の石屑も三個採集された。又第一地點よりも少し時代の新らしい第四及び第十五地點の堆積から出た石器と認められるものは、その製作手法第一地點の似て、稍進歩しているように見える。これらはシナントロプスの以前にも以後にも周口店に人類の棲息したことを想像させる。

五 シナントロプスの生活様式

第一地點の主洞、下溝、下洞、鴿子堂洞等各部分から採集された化石獸骨は夥しき數量に達し、約九十種あり、その中十九種は新種又は新變種と認められる。最多いのは中國ヒエナで、凡そ一千個體分を算え、これに次ぐはネズミ

の類六種、小形な變種狼、中國狸、コルサク狐等で、孰れも洞穴に棲む種類だが、この他河沼の邊に出没する海狸、獺、水牛、廣角鹿の類、山林にすむ食肉獸、鹿、山羊等、砂漠地帯に見られるマルモット、駱駝のほか駝鳥等多種多様である。洞底に近づけばヒエナ等洞棲獸の骨が多く、8及び9層になつてシナントロプスの骨が見られる。後者はヒエナに代つて本洞に占居したらしく、多くの獸骨の一半はヒエナ等により、一半はシナントロプスによつて各方面より持ち來られたものである。此他鳥類の骨は五十六種の多きに上り、前述のごとく、駝鳥の卵殻破片もあつた。兩棲類及び爬虫類は各四種、前者ではヒキガエル、後者では種未定の蛇が多きを占める。貝殻は九種、一種を除いて他は陸棲である。植物遺残では朴に類する *Celtis barbouri* Chaney の核が隨處にあつたことが判明している。これは第十二、第十三及び山頂洞等諸地點にも見られ、これに近似する現生種の實はダクタ・インディアンの嗜好するところから、シナントロプスも食料として採集したのである。と云われる。原始石器の原石は山下の河原や若干キロ米を隔てた山地から持ち來られたのである。シナントロプスは日常食料獲得の爲めに龍骨山を中心として少なくとも數キロメートルの範圍を活動地域としたことが察せられる。シナントロプスの食生活は石器の使用、その用途に適す

る器形の選擇及び製作、焚火の利用等によつて既に人類としての最初段階よりも一步を進め、事物に注意を集中し、特殊な用務に煩わされることが多くなつた。この事は彼等をして完全な人類としての地位を確保させたのみでなく、常にその向上に對する意欲の動くに従つて徐々に生活の新生面を開拓させた。直立歩行の享有によつて解放された双手の活用は咀嚼機能の節約という點だけに就いても、智能發達の促進に重要な役割を演じたことが察せられる。犬齒はその尖端が他の諸齒と同等位にあるよつになつても、尙牙としての用を果せるが、それさえも必要缺くべからざるものとしてではなく、習慣上或は便宜上尙咀嚼以外にも利用されたのである。

斯くして獍猛な食肉獸に對抗するに木石や火をも利用し得た彼等には眞に怖るべき生物は存在しなくなつたが、尙往々其襲撃によつて生命を殞すこともあり、又同志打も屢々行われ、殊に洞穴生活には墜落、落盤等によつて非業の死を遂げる危険もあつた。昭和二年發掘開始以來、同十二年蘆溝橋事件による中止に至るまでの十一年間（民國一六―二六年、一九二七―一九三七）に第一地點堆積から檢出されたシナントロプス遺残はかなり多數に上り、中でも多いのは齒であつた。ワイデンライヒ氏は先づ永久齒を成年と少年とに分ち、又大形なるを男、小形なるを女性と看

做し、尙頭骨、下齶骨等による所見を綜合して、個體別を試みた結果、大正十二年ツダンスキ氏の採集した二齒までもこれに加えて、遺残のすべてが凡そ四〇個體分に達することを明かにした。これられはA—Oの十五區に散在し、又屢々同一區内に三個體以上のものが存在したこともある。このうち主洞の第五層以上に存したのはA B兩區の八個體、又E區の一個體及びF區の四個體を除いて、他の遺残は主洞の8乃至10層又はこれに相當する層位にあつて、二七個體に屬することが確められた。然るにこれらの四〇個體のうち成年者は二青年を加えて二五、小兒は一五個體で、完熟の年齢に達したものは一例だけである。小兒死亡率の甚大なるは彼等の生活がきわめて夭死の危険に富み天壽を全うするの困難であつたことを示している。遺残中最多き齒は三十個體分を占めたが、下齶骨は一三個體、頭骨はたゞ上齶骨を存したるもの一例を別として僅に八體分四肢骨も八體分に過ぎず、脊椎は只一個の第一頸椎が得られただけで、確に埋葬されたと看做すべきものは一體もない。八個の頭骨中六個までは撃打による外面の缺損、截痕、搔爬痕、凹陷、龜裂、内板の缺損等を示し、略ぼ脳頭部の全形を復原し得るものもあるが、孰れも底部を缺失し、腦髓をとる爲めに破壊された疑さえるもある。下齶骨の中央部を存するは只二例だけで、他はすべて打壞されたりしく見

え、大腿骨破片には表面漫漶せるあり、焦げたるあり、縦割されたものもある。ワイデンライヒ氏はシナントロプスが首狩をしたにしても、當初四肢骨の檢出されない間は人肉を啖うことはなかつたろうと想像していた。併し前記の如く四肢骨が極めて少く、散亂せる状態を知つて、彼等に食人の風があつたことを信するようになった。鬪争殺害の瀕發は人種分化の兆があつたことを想像させる。例えば第一地點のシナントロプスでは頭骨の低いものが多かつたが他にこれより高く、腦の容積大なるものがあつたかも知れない。兩者の優劣は自ら明かである。

六 シナントロプスの特徴

ブラック氏は第一地點の發掘が開始された昭和二年十月十六日ボーリン *Birdal Bohn* 氏がB區で採集した七八歳の小兒の左下第一大臼齒と大正十年にツダンスキ氏がA區で採集した小兒の左下第一(?)小臼齒の石膏模型を主型、後者が同じくA區で採集した壯年の右上大臼の石膏模型を副型として人科の一新屬の設定を提唱し三齒に就いて詳記したような特徴を有する其一種を *Sinanthropus pekinensis* と命名し、ブラック及びツダンスキ兩氏を其の報告者とした。これより先きツダンスキ氏が右の二齒を *Homo sp.* として報告したからである。翌年B區より多數

の齒と小兒下齶骨が発見され、尙此年度の作業を了る。頭A區から三個の大臼齒を存する下齶骨が得られた。併しつゞく第三年度にも頭骨が見當らず、漸く十二月二日になつて裴文中氏の手で小洞のE區から脳頭骨が発見された。翌年一月ブラック氏はこれに就いて概略の所見を即報し、ピテカントロプスに似てこれより進化せる型を呈することを附言した。シナントロプスの典型標本は齒から轉じて、此E頭骨になつた態である。當時氏は此頭骨を壯年初期乃至青年女性と考へたが、固着せる母土の除去されるに至つて少年男性と推定した。ワイデンライヒ氏もこれを八―九歳を出ない男兒と認めてゐる。此発見によつて一八九四年以來唯一の存在であつたピテカントロプスの人科に屬することゝが確實になり、且つシナントロプスをこれと同屬と看做して可なることが考へられた。兩者が今尙夫々別個の名稱で記述されるのは、便宜上慣用に從うだけで、必ずしも當初これらに附與された分類上の意義を尊重し、夫々特殊な新屬新種たることを信するが故ではない。今や何人も兩者を原始人類 *Homo primigenius* 及び現生人と同じくホモ屬 *Genus homo* に編入するに異議を唱へることなく、問題はたゞ種の如何に歸したのである。

II頭骨を第一として、爾來數個の頭骨が発見された。併し其一半は脳頭骨の一部を存するに過ぎない不完全なもの

である。即ち第二は前者に先だち十月に採收された材料を翌春研究室で整理中檢出されたので、後頭部のない壯年女性性のDI頭骨である。第三は昭和九年六月及び翌年六月にC文化帶と同層に當る主洞堆積の頂よりの深さ二〇米の第二層 Level SI から出た左右顳顬骨及びこれと接合する左頭頂骨から成る壯年男性のHII頭骨。第四は鴿子堂洞C文化帶より出た壯年男性のGI頭頂骨前半。第五は昭和三年B區採收材料中より檢出された頭骨破片。この第四と第五とに就いてはまだ殆んど記載されてない。第六は昭和十一年これもC文化帶と同層の第二層から出土した左右頭頂骨二片、前頭骨左側部及び右顳顬骨鱗狀部破片から成る壯年女性II頭骨である。第二、三及び六頭骨に就いては屢々斷片的に記載されたゞけで、第一のEI頭骨を除いては腦筐の計測に適するものがなかつた。然るに昭和十一年十一月L區から三個の頭骨が発見された。LIは壯年男性、LIIは熟年女性、LIIIは壯年男性で、孰れも破潰してはいたが、接合復原に成功し、シナントロプスを代表する三個の成年男女頭骨が得られ、最初の小兒頭骨に代つて新にシナントロプスの典型標本となつた。これらには孰れも顔面骨の一部が附隨してゐる。ついで六個の齒を存する女性の上齶骨OIが発見された。そこでワイデンライヒ氏はLII女性頭骨に此OI上齶骨と女性下齶骨HIとを宛てがい、又鼻部、眼窠、顳骨等

には男性LIII頭骨を参考して、女性頭骨を復原し、更に軟部で蔽われた頭部模型を製作して、できるだけ眞に近い相貌をうつし出そうとした。この模型を見ればシナントロプスは紛れもない人類であり、且つネアンデルタール群の人に比べて、一層猿に似ていることがわかる。但しラ・シャペユ・オウ・サンなどネアンデルタール人ではゴリラやチムパンジーの如く顴骨下縁につゞく齶骨顴骨突起の稜線が漸次に前下方に走るのに、シナントロプスでは現生人と同じく凹彎している。これは別の男性上齶骨破片でも確認されたシナントロプスの特徴の一である。L區頭骨発見の後ち翌年も亦發掘がつゞけられたが、八月七日事變の勃發と共に此燿かしい成績をあげた事業も第十一年度途中で惜しくも打切られた。爾來十年。再開の朗報に接するのも遠くはなかるう。

シナントロプスの諸骨に就いては既にワイデンライヒ氏の周到精査な研究報告が逐次刊行され、頭骨の綜合記述だけが残されてある。尤もブラック、ワイデンライヒ兩氏の同時發表した諸論文によりこれも大體は明かにされた。頭骨の主な特徴として擧げられたのは次の諸點である。

- 一 脳頭骨極めて低く、長さの比例にすると黒猩猩と同じ位の高さである。
- 二 幅は耳孔直上で最大、上るにつれて狭くなる。

三 眼窠上隆起左右一連をなして厚く、突出し、額との界に廣く、比較的深い溝が横たわる。

四 後頭隆起強く丸味を帯び、後頭骨はこゝで強く屈曲している。

五 大後頭孔や、後方に偏し、水平に近い。

六 矢狀隆起著明、頭頂骨乳様部にも厚き隆起あり、三、四と對應して、項筋及び咀嚼筋の強きことを反映する。

七 顳顬骨岩様部が現生人類のように一直線でなく、黒猩猩のように内頸動脈孔の邊で前外方に開く鈍角をなして屈曲してゐる。莖狀突起がない。

八 前頭竇は小さい。

九 頭骨腔の推定容積は約八五〇乃至一二二〇cc。男女の差が著しい。

顔面に就いては次の諸點が注意される。

一 眼窠甚深く、廣潤、淚囊窩がない。上眼窠披裂狭く短く、眼窠外縁丸味を帯びている。

二 眼窠間隔大、鼻梁扁く幅廣く、鼻前頭縫合に於ける陥入は淺い。

三 梨子狀孔低く、幅廣く、鼻孔の外縁下部が著しく前方に向う。前鼻棘がない。

四 顴骨高く、扁たく、外方よりも寧ろ前方に向く。

五 上齶が強く前方に凸出し、その前面膨れ上り、眼窠

下孔より第二小白齒位に至る狭い溝で内外二部に分たれる。犬齒齒槽隆起は鼻下溝の外界をなしている。

六 口蓋高く高い。

七 顴弓は缺失して残存しないが、強く張り出し、且つ低く位し、前下方に傾斜せることが推測される。

八 上顔廣く低く、上齶齒槽部が比較的狭い。

尙頭骨内腔に注入した石膏型によると、腦型は類人猿でも、シナントロプス、ピテカントロプス、ネアンデルタール人でも、現生人類でも皆卵形を呈して、大差がないが、たゞ著しく目につくのは、此順序で高さが、殊に頭頂部で、絶對にも比例に於いても大きくなることである。長さに於ける増大はこれに次ぎ、幅では差が少い。常識として考えられてゐるように、前頭、顛顛、及び後頭葉が特に大きくなるということはない。D頭骨の前頭葉を上から蔽う前頭骨の内面にはその著明な壓痕が印せられている。これはピテカントロプスにも見られるが、類人猿や現生人にはかゝることがない。E頭骨には著明でないが、D頭骨内腔の石膏型では前頭葉の前端が嘴狀に伸びている。又中硬腦動脈の印象によると、此動脈は現生人類では棘孔から頭骨腔に進入して、すぐに前中後枝にわかれ、前枝が最大で、本幹の姿をなすか、或は早く前後二枝に分れ、後枝から中枝が分れるのを普通とする。然るにシナントロプスでは左右十

三例のうちに斯る例はなく、前中後枝にわかれても、後枝の殆んどなきことがあり、常に中枝が最大且つ最長であり、一般に分岐貧弱である。かゝる状態は類人猿殊にゴリラに見らるゝところに類してゐる。これに對しネアンデルタールでは現生人類にある型のうち、早く二枝にわかれ、後枝が中枝を出す類が見られ、又ピテカントロプスでは前枝の大なる點で現生人に於ける型に近い。

次に下顎骨は十四例あるが、GI、HI、BIが保存稍良好で復原補足して、夫々壯年男性、壯年女性及び少年女性を代表させることができた。これによつてみると、下顎骨には類人猿程ではないが、男女の差著しく、女のは小さい。又小兒のでも成人のと甚しく異なるとは見えない。男のは現生人に比して大きく且つ頑強、女のも枝部の高さ、幅等中國人よりは遙に大きい。最も著しい特徴の一は體前面が著しく傾斜して、下前方に向い、類人猿程ではないが、人類中最も斜めである。ハイデルベルヒ下顎骨體前面の傾斜は略ぼ壯年女性と同じく又少年では大人よりも傾斜が弱い。其他齒槽弓は馬蹄形で長く、比較的狭く、門齒及び犬齒の列び方は現生人では直線に近いのに、シナントロプスでは均等な弧狀を呈すること及び齒槽列の面と下顎骨下縁の面とが平行に近いこと等、孰れも原始的な性状が見られる。尙著しい特徴として頤のないことを挙げねばならないが

類人猿と異つて、全くないわけではなく、實は下顎骨の中央前下部周圍よりは少しく高くなつてゐる上に、骨性頤及び頤三角と名づける二つの特殊な造構が伴つて、その存在を示している。これらの細かい特徴に就てはこゝに記述を省略するが、特に注意して置く必要があるのは、下顎隆起なるものの存在である。これは臼齒齒槽部舌面に横わる狭い横帶狀或は結節狀をなす隆起で、ネアンデルタール人の類及び歐羅巴人には稀れだが、中國人には往々見られる現象である。其他シナントロプスの下顎枝が直立して大なることも亦原始的な状態を示すものである。咀嚼筋附着面の起伏著明、鳥喙突起幅廣く、厚く、關節髁強く、半月截痕は深くない。

上下の齒は顎骨に残存せるもの、遊離散在せるものを併せて一四七個、内二個はツダンスキ氏發見である。乳齒は一三個、下顎のものだけである。永久齒は上五二、下八二個、男女各一六八分あり、内各六人は四乃至一五歳、他は成年である。出土區はEJを除くA乃至Oに互つてゐる。ワイデンライヒ氏は大なるを男、小なるを女性と判定し、頭骨及び下顎の大小強弱と對比してこの判定の妥當なるを認めた。

一般に永久齒は齒冠齒根共にネアンデルタール人類よりも、現代人よりも大且つ頑強で、根甚だ高く、殊に門齒及

び犬齒の根がそうである。下齒の齒冠は門齒を除き他の最新世人類よりも高さに比して前後に長く、殊に大小臼齒で著しい。上門齒は冠根とも眞直で、屈折せず、舌面の側縁隆起して、所謂シャベル形をなし、其下界に底結節がある。上犬齒は大にして尖り、珙瑯帶あり、舌面が起伏複雑である。下犬齒もこれに相應して幾分門齒に近い。上下第一小臼齒は根が二分又は三分する傾向に富み、上第一及び第二大臼齒の齒冠は長方形又は菱形、前頰側咬頭は前頰方に膨出し、珙瑯帶著明、根強く、第二の根は癒合する傾向がある。上第三大臼齒はこれらより小、齒冠三角形をなし、根は多少とも癒合している。カラベル結節はない。下大臼齒では第二が第一より少しく大、結節の數は六又は五個、ドリオピテクス型溝紋を有する。齒は概ね髓腔が廣い。この腔が廣く根基部にまで及んでゐる状態をも牛齒性 *Taurodontism* というならば、類人猿にも、現生人類にも見られ、特殊な分化現象とは認められない。

シナントロプスの齒は一般に變異多く、原始的形態と進化的形態とが同じ顎の齒に相ならんで見られる。前齒は上下とも前方突出著明、若きものでは屋瓦狀、老人では鉗子狀咬合を常とし、齒も狭く前方に伸び、齒間隙は見られないが、乳犬齒の前後には間隙あり、猿の乳齒に似ている。上乳犬齒は下のものより強大で、咬平面より少しく突出し、

第一小白齒を凌いでいる。

頭骨及びその各部分以外では、大腿骨破片七個、上膊骨二個、鎖骨、月状骨、第一頸椎等各一個が発見されたものであつた。此の他ブラック氏などから問題にされたものに末節指骨と第三地點出土の橈骨があるが、前者は鹿の類、後者は猿のである。

大腿骨は大き、形、比例、筋肉附着面の状態等に於いて類人猿と異なり、現生人のと略ぼ同じである。第一例の復原した全長は四〇〇、第四例で四〇七耗、中央周徑七七―九八耗。比較的短く、少しく前方に凸彎し、彎曲の頂點は體中央より下方の最細い部分に當つている。體は轉子下及び臑部で著しく扁い。柱状櫛があるが低い。轉子下部の内縁は櫛状を呈している。これは現生人類でも稀れに見られる形成である。體上部内縁著しく凸隆し、最狭部稍高位する。類人猿に於ける如く轉子間線及び櫛なく、又ネアンデルタール人類に見らるゝ如く轉子下櫛が大轉子基端まで達している。これらは現生人類にも見られ状態である。髓腔は現生人に比して狭く、壁が厚い。X線透射によると上體部骨材の配列に分化の傾向少く、粗雜な點などで類人猿と人類との中間状態にあるものと云える。ネアンデルタールほど頑強でなく且つ彎曲が強くない。

上膊骨は第二例の復原全長三三四耗で、長いが、比較的

細く、腔狭く、壁が厚い。三角粗隆強く、下半が細く見える。類人猿とは大き、比例及び形に於いて著しく異なつてゐる。

鎖骨、月状骨及び第一猿椎も現生人類のと大差なく、顯著な特徴は認められない。

最新世人類で、シナントロプスのように、全身に亘り、多數の骨の発見された例は他にない。ピテカントロプスの大腿骨は後年五例程追加報告されたが、所屬が疑われ、且つ上膊骨がない。シナントロプスの人科に屬することはその上膊骨と大腿骨との出現によつて動かすべからざるものとなつたのである。

七 ピテカントロプス

一九二九年の末に発見報告されたシナントロプスがピテカントロプスに似ているというブラック氏の見解は後者を発見報告したデュボア氏を除く諸學者の賛同を得たばかりでなく、シナントロプスをよろしくピテカントロプス・ペキネンジス又はシネンジスと稱し或はピテカントロプスをシナントロプス・トリニレンジスと稱すべしというものさえあつた。ワイデンライヒ氏もシナントロプスを *Homo erectus pekinensis*、ピテカントロプスを *Homo erectus javanicus* と稱してよいことを述べている。ブール氏は兩

者を prehomids 前驅人類の名の下に原始人類より區別すべきことを提唱した。この頃ジャワでも地質調査事業が進捗し、ガンドンの後期最新世堆積よりネアンデルタール型の頭骨が多數發見され、ホモ・ソロエンジスと名づけて報告されたのについて、ピテカントロプスに屬すと認められる頭骨の各地の前期或は中期最新世堆積より發見されたものが昭和十二年一九三九年までに五例に達し、ケーニヒスワルド G. H. R. von Koenigswald 氏によつて概報された。これらをピテカントロプスに列することにはデュボア氏から強硬な反對意見が出たが、ケーニヒスワルド氏等の示した寫眞によると、この反對論には多くの矛盾があり、何としても賛成しようがない。孰れにしてもシナントロプスとピテカントロプスとの異同を知り、人類の進化過程を推論するには近年發見された後者の諸頭骨を除外し得ないことになつた。

ジャワの化石哺乳動物群にはガンドン Ngandong トリニル Trinil チェチス Djatis カリグラガー Kali Gragah の四群が數へられ、これらは夫々ノトプロ Notopoero カブド Kaboeh プーチヤガン Poetjangan カリベン Kalibeng の四地質層位に該當する。トリニル、チェチス兩化石群には共通な種が多く、昔デュボア氏はそのうちの古い種に従つてピテカントロプス層を第四紀下層乃至第三

紀上層に擬定したのだが、出土地トリニルの新しい調査によると、トリニル群を包含し、ジャワの最新世としては中期に當ることが明にされた。併しピテカントロプス遺残にはトリニル群に伴うものも、チェチス群に伴うものもあり、即ち、シナントロプスよりは古い時代に屬するものがあることを知つて置く必要がある。ケーニヒスワルド氏によると、ジャワの哺乳動物は盡く亞細亞系に屬し、アウストラリア系のは、東方バリ島を隔てたロムボの島を限りとして、西方からは發見されない。亞細亞系哺乳動物の中には印度とだけ、又は支那とだけ共通な種類がある。印度との連絡は古く、西部ジャワからは印度のシワリク群の典型とされる河馬なども發見された。河馬は支那にはいない。これに對して猿、バンテン牛、狸々、手長猿は支那にはいるが、印度には化石としてはいない。然るに後者の類はヂエチス群にも含まれるから、最新世の始めにできた大陸との接續によつて支那南部、臺灣、フィリッピンを経て進入したと推測される。此方面との陸地直結はやがて再び斷絶し、最新世中期になつて再び印度方面とが陸續きになつたらしく、即ちトリニル群に突如として鹿及びナマヂクスに類する象の出現が見られる。ピテカントロプスはこの第二次の印度ジャワ群の進入以前よりジャワに棲息したとしても、カリグラガー群を包含する第三紀層には見られない。故に、

所謂シナ、マライ系哺乳動物群に屬することは略ぼ信ずるに足りる。後者のジャワに達する至近梯段として先づ問題になるのは南支那である。南支那からは既に猩々、猿などの熱帯性哺乳動物化石も発見され、將來に於ける人類遺残の出現が期待されている。

デュボア氏の報告したピテカントロプス遺残のうち疑問の餘地なしとされるのは、トリニルの頭骨とこれに先だつて前年発見されたケヅンブルプスの下顎骨だけで、孰れも東部ジャワに限られたが、一九三六年には東部のモデョケルト Modjo kerto 附近から小兒頭骨、中部のサンギラン Sangiran 地區ブ克蘭 Boekoeeran から壯年男性下顎骨、一九三七年に同地區バパン Bapang から破壊してはいたが、往年のよりも多くの部分が保存されている第二の老年女性頭骨、翌年同タンヂェン Tandjoeng から不完全な第三の女性頭骨、翌々年同じくタンヂェンから男性頭骨の後頭部破片と上顎骨とが発見された。これらのうちヂェチス群包含推積から出たのはモデョケルト附近の小兒頭骨、ブ克蘭の第二下顎骨及び第四頭骨たるタンヂェンの後頭骨と上顎骨である。これらの頭骨はケーニヒスワルド氏之を携えて北平に赴き、ワイデンライヒ氏指導の下に研究し、同處で石膏型も作られた。以下ワイデンライヒ氏に據つて、シナントロプス頭骨とピテカントロプス第二頭骨とを比較

して、其異同の主な點を明にし、兩者の關係に對する氏の考察の概要を紹介しよう。

ピテカントロプスの第一頭骨はシナントロプス LI 熟年女性頭骨よりも少しく小さい。そこで後者を前者と同じ長さに縮小して、兩者の正中輪廓圖を重ねてみると、高さも、後頭部の輪廓、顛顛線の位置、及び彎曲度、顛顛骨鱗狀部の上界等がよく一致しているが、シナントロプスでは顛顛骨の後部にあたる所謂オペリオンの邊及び前頭顛頂縫合のあるブレグマの邊で正中輪廓線の彎曲がピテカントロプスより明に弱く、低い。これに反してシナントロプス前頭部はピテカントロプスより彎曲が強く、内腔石膏注型によると、前頭葉の高く、龍骨狀をなし、前下方に伸びて所謂眼窠嘴を形成する點で手長猿、黑猩猩に類するの、歐羅巴人及び支那人ではピテカントロプスのように低いものがあり、ガンドンのホモ・ソロエンジスやアフリカのローデンア頭骨も後者に類している。即ちシナントロプスはこの點では最も原始的な状態を示すものである。其他眼窠嘴に行して之を内外部に分つ溝や眼窠瓣蓋上の溝及びこの部の廻轉の形構などでもシナントロプスは黑猩猩々に似ているが、ピテカントロプスはこれと異なつてゐる。又シナントロプスは顛顛骨岩様部が黑猩猩等すべての猿のように内頸動脈孔のところ、前外方に開く鈍角をなして、屈曲する

が、現生人類及びネアンデルタール人類では眞直である。尤もホモ・ソロエンジス頭骨第六號ではシナントロプスに似た状態が認められる。シナントロプス頭骨四例では前頭竇が小さく、眼窠上隆起は海綿質から成つてゐるが、ピテカントロプス及びホモ・ソロエンジス第一、四、及び五號では前頭竇が大きく、眼窠上隆起にまで及んでゐる。但し人類及び猿類では前頭竇の在るものとなひものもあり、孰れが原始的とは云えないが、前頭葉の原始的な形態を示すことから類推して、シナントロプスに於ける如く、前頭竇の小なるは人類にとつて原始的な性状と云えるであらう。

かくシナントロプスはピテカントロプスに比べて原始的な性状を多くもつてゐるが、後者の脳筐容積は第一號女性では約九五〇、第二號女性では八三〇ccに過ぎず、これらより大なる第四號男性でも、骨壁が厚いから九〇〇ccを多く超えない。これに對してシナントロプスではE小兒でも九一四、LII女性で一〇五〇、LIII男性で一〇〇〇、LI男性では一二〇〇ccで、一般にピテカントロプスの方が小さく、これに相應して後者の脳筐は扁く低く、前顳顬部の狹窄著しく、後頭部幅廣く、圓く、又四號の男性頭骨には類人猿の矢狀櫛に相當する正中隆起が著明である等原始的な性状が認められる。殊に第四號頭骨に屬する上顎骨は甚だ大且つ幅廣く、強く突出し、これに相應して齒も頗る強大で、

極めて原始的な容貌を具えてゐる。但し犬齒は幾分前後の齒より突出し、且つ第二門齒との間に隙を有するが、比較的小さく、類人猿の犬齒とは大き及び形に於いて尙明に異つてゐる。第二號下顎骨はこの上顎骨に比しては小さいが、これ亦強大で、頤はなく、大臼齒は大きく、且つ第一より第三に至るに従つて大きを増すが、犬齒の齒槽は小さい。但し下大臼齒にはドリオピテクス紋がない。

以上の所見を綜合すると、シナントロプスとピテカントロプスの差異の一部は概ね程度の差であり、他は現生人類の間にも見られる地方型或は人種の特種性に類し、兩者の近似には蔽うべからざるものがある。尙ピテカントロプスの大腿骨なるものはこれに屬しないと見ても、第四號頭骨基底部の状態はシナントロプスよりも寧ろ現生人に似てゐる。ピテカントロプスも亦シナントロプスと同じく、直立前行了したことは疑うべくもない。彼等は其棲息時代が甚だ古く、他の人類諸形との關係が明白でない爲めに假に異つた屬名で呼ばれるが、現生人類に達する進化過程中ほぼ同時代且つ同一階梯にあつたと考えられる。ピテカントロプスの粗野、シナントロプスの稍優雅に見えることは、アウストラリア人の中國人に對するに似て、現生人類に於ける人種乃至地方形に類する別を示すに過ぎないであらう。彼等は其の孰れよりも一層類人猿に近似せる共通祖先を有し、後

者はドリオピテクス或はシヴァピテクス其他の如く既に特殊化を示したものでなく、これらに類して原始的形態を有したことが推測される。この意味で考慮されるのはダート氏及び後にブルーム氏の報告した二例のアウストラロピテクス *Australopithecus Dart and Broom* である。前者は若くして、シナントロプスに似た犬歯を有し、後者は成獣で、犬歯を缺失してゐるが、齒槽の大き及び形、間隙の缺如等よりこれ亦犬歯の大きくないことが推定される。尤も彼等は頭骨の形構より見て真正の類人猿であり、人類ではなく、人類に進化すべきものに近い古類人猿群に属すというだけである。

八 ホモ・ソロエンジス

シナントロプス及びピテカントロプスに次ぐ古さの亞細古石器時人にはジャワのホモ・ソロエンジスがある。昭和六年（一九三二）八月テル・ハール *Ir. ter Haar* 氏はガヴィ市北方一〇キロの小村ガンドン *Ngandong* 附近でソロ川の現水面上二〇米の高さにある河段堆積で化石床を發見し、二箇處で發掘を行ったところ、九月十五日に虎、同三十日に猿の頭骨らしいと云つて採集されたものがある。前者はオツペノールト氏 *W.F.I. Oppenoorth* によつて女性頭骨（第一號）、後者は小兒の前頭骨（第二號）なるこ

とが明かにされた。トリニルとは一〇キロを隔てるだけだが、ピテカントロプス頭骨とは明かに異なり、又伴出の獸骨も別の種類である。そこでオツペノールト氏はこれらの頭骨にホモ・ソロエンジス *Homo soloensis* 一名ジャワントロプス *Javanthropus* と命名して報告した。翌年同じ地點から第四乃至第七、翌々年第八乃至第十一號頭骨が發見され、オツペノールト氏によつて略報された。詳細はマイスベルフ氏 *A.W. Mysberg* の手で研究發表されるといふことである。

ホモ・ソロエンジスの出土した堆積はノトプロ層に屬し、包含化石はジャワ鹿、テル・ハール氏猪等を指標とするガンドン哺乳動物群で、後期最新世に當つてゐる。頭骨はピテカントロプス及びシナントロプスより遙に大きく、長く、高く彎曲も現代人に比べれば弱いが、兩者よりも強い。最大幅は耳孔より遙に上方にあり、前頭の傾斜も著しく、眼窠後方の狹窄が弱い。顳顬線の位置も低く、乳嘴突起は甚だ強く、耳孔深く陥入し、鼓骨が下方に突出し、乳嘴截痕狭く、顳頂骨乳様角に於ける隆起は強くない。乳嘴上櫛弱く、後頭隆起と連續しない。後頭骨項面はピテカントロプスの如く膨隆せず、浅い凹みをなし、後頭隆起は中部で凸出するも、側方に向つて低くなり、その下界には鮮明な上項線がある。中央には強き外後頭結節あり、下方外項櫛に連な

る。

併しピテカントロプスとは次の諸點で近似する。前頭隆起著明だが、シナントロプスの如く横溝で額と界されることなく、これと直續する。額はピテカントロプスに似て扁く、前頭結節がない。第一、四、五及び六號頭骨いづれもそうである。ピテカントロプスの顙門部には十字狀の隆起があるが、同じ状態は第六號頭骨に見られる。ピテカントロプスでは天頂の少しく後方オベリオンの邊に凹陷なく良く凸彎するが、第一、三、五及び六號頭骨でもそうである。又ピテカントロプスと同じく、第一、四及び五號頭骨では前頭竇が眼窠上にまで擴つてゐる。併し第六號頭骨は前に述べたように、顙骨岩様部が前外方に開く鈍角をなして屈曲している點で、シナントロプスに似たところもある。ホモ・ソロエンジスにシャベル形門齒や下顎隆起を有するものがあるか否かは明がでない。

歐羅巴の中期最新世人類のうち原始人類 *Homo primigenius* 又ネアンデルタール群と稱せられるものとホモ・ソロエンジスとは脳頭骨低く、眼窠上隆起強く、額の傾斜せる等で一致するが、後者は前頭隆起を有するなど一層原始的に見える。人類の生成に關しては一元を、人種の成立に關しては多中心を唱えるワイデンライヒ氏はホモ・ソロエンジスをアジア型原始人類 *Homo primigenius asiaticus*

としてラ・シャペーユ等の歐羅巴型及びローデシア *Rhodesia* 頭骨によつて代表されるアフリカ型原始人類と區別し、ピテカントロプスからスンダ人乃至はワヂャク、タルガイ等の如き前驅アウストラリア人へ進化する中間型と認めてゐる。但し今後中國から同じ古さで、併しこれと多少とも異つた原始人類の骨が発見されれば、氏の謂ふ如き類別にも多少の變動を來すであろうと考えられる。歐羅巴の原始人類には夙に前頭の傾斜弱きスピー第二號、ワイマル・エーリングスドルフなど他の一般同類と異なるものがこれらと同時代にもあつた。これによつて人種を別つことができるとしてもそれは僅に基本的な特徴に就いていうだけで、原始人類時代にまで溯つても、今までには純粹な人種などは檢出されなかつた。この點は人種及び人種混血を論ずる人々の特に注意すべきことである。

九 山頂洞人

われわれ亞細亞人にとつて、シナントロプスに譲らない程に重要な意義のある最新世人類は山頂洞人である。山頂洞 *Upper Cave* は第一地點のシナントロプス層が南方に擴がつてゐるその南堺の直上にある石灰岩の小洞穴で、其存在は當初全く知られなかつた。昭和四年E頭骨が発見され、これによつて第一地點主洞の大發掘に着手する準備と

して、翌年丘頂の表土が試掘されたとき、北向きになつてゐる此洞穴の開口部が初めて露われた。洞内にはシナントロプス層とちがつて、灰色の固まり方の弱い含化石礫土が充填し、後代の堆積であることが推知された。そこで昭和八年一九三三年ブラツク氏指導の下に、春秋二季、それに翌春の數日を加え、一四二日を費して、組織的な完全發掘が行はれ、内容の全貌が明かにされた。人骨を除く諸遺物に就いては裴文中氏が詳報したが、人骨に就いては其年ブラツク氏が急死したので、後任のワイデンライヒ氏が一九三九年に所見の概要を報告した。本洞は高さ四米、幅五米のアーチ形洞道を進むと、洞室はこの洞道底の高さより下方にも廣がり、上室及び下室の別をなしている。上室は奥行八米、幅は奥の南壁で一四米、この方の壁は石灰岩から成つてゐるが洞道底側には硬く赤いシナントロプス層があり洞道につゞく上室の床面にはこれの焼けた痕がある。床及び壁面は石灰華で蔽われている。下室は深さ八米、少しく北東方に傾斜し、且つ膨らみ、又其東部には深い窪みがあり、底はシナントロプス層に達している。

洞内からは人の頭骨その破片、及び下顎骨が七個體分、二個體に屬する脊椎若干、大腿骨及びその破片七個、腕骨二個、脛骨一個、其他が發見され、こゝが墓になつていたらしく、赤色料が骨の附近の土を蔽つていたということであ

る。併し同一個體に屬する骨が幾米かを隔て、異なつた層位にあつた例もあり、埋葬直後獸類により、又は後ちに人によつて荒されたか、地震地之りの爲めに轉位したか、或は襲撃を蒙つて、切斷された肢體が洞中に投棄されたのか、孰れにしても散亂している上に、四個の頭骨には銳器又は鈍器で激打したか或は落盤によつてか、損傷が認められた。七個體中四體は成年、一體は若年、一體は五歳位の小兒、一體は嬰兒乃至胎兒である。成年者は男女各二體、男子の一は六十歳を超えたらしく、他はこれより若い。彼等は一家族を構成したものであろう。上洞に定住したとも、一時こゝに入り込んだとも考えられる。

上室には三個の文化層が認められた。遺物が多く存したのは洞口の頂きの高さに近く、上室底上約三米に位した第二層である。下室にも二個の文化層があつたが、孰れにも遺物には差異が認められない。人骨の多くあつたのはこの下室内の第四文化層の上方であつた。

遺物には利器としての石器が至つて乏しい。其他多數のヘマタイト塊のほかには次の人工品があつた。すつて一面から孔をもみあけた石灰質の石のヘマタイトで赤く塗つてある小玉七個、これは第二號女性頭骨の近くにあつた。及び扁い川原石に兩面から穿孔せるものが一個、魚の脊椎が十個、加工してないが、脊髓管を利用して、垂飾に用いるこ

とができる。鳥骨管が三個、孰れも横にすり截つた條痕がある。最も多いのは根に穿孔せる獸齒で、其數一二五個、そのうち二五個には赤色が塗られてある。約半數はアナグマ、三分の一近くが狐の犬齒で、下犬齒が多い、其他鹿及び虎の門齒、野猫及び鼬の犬齒などが三個乃至一個あつた。これらの穿孔は錐揉法によらず、根の兩面を豎の方向に抉つて貫通させた形跡がある。長さ約八糎の少し彎曲した骨針が一個、メドの部分で折れている。ワピチ鹿角の基方部をよくすり磨いた長さ三八糎で、彫刻のない用途不明の所謂指揮棒に類するもの及び大きな鹿の下顎骨の枝部及び先端を打ちかき、齒を去り、全面をすり磨いたものが各一個あつた。これらの所見により山頂洞人の天然資材の採集、撰擇、利用、加工技術、製作品の種類等に關する文化程度は歐羅巴のアウリニヤシアン、ソリュトレアン、殊にマグダレニアン文化に類し、獨自の特殊様相を呈することが認められた。

頭骨七個のうち完全なのは老年男性一個、壯年女性二個で、後者の一には下顎がない。男頭骨及び女性頭骨の一は大きく、孰れも長頭である。老年男性頭骨(一〇一號)は前頭廣く、眼窠上隆起強く、額比較的短廣、眼窠低く、長方形、下顎骨幅廣く、下顎角外方に反り、顔貌クロマニヨン老人、オベル・カツセル男、アルジェリアのメクタ男

などに似て、これらよりも眼窠上隆起強く、左右一連りになり、額が低くこげ、腦頭骨が低い等一層原始的である。顔の示教ではこれらと大差がない。推定身長一七四糎、この點でも彼等と大差ないが、鼻孔比較的幅廣く、鼻骨が凹彎し、顴骨が垂直且つ前方に向い、鼻前窩あり、上顎齒槽突起凸彎し、且突出せる等の點で現歐羅巴人及び末期古石器時代諸人種とは異つてゐる。歐羅巴の古石器時代人には幾分アウストラリア人に似たものもあるが、この男頭骨は前頭、顔、下顎等後者より幅廣く、鼻前頭縫合部の陥入が強くない。小金井博士提供のアイノ、ブラック氏記載の史前甘肅人、及び三宅博士等の記載の古代滿洲人の頭骨寫眞及び計測値に幾分似たところもある。これらの後代人は腦頭部高く、短く、顔が狭く長い等の點で、これとちがつてはいるが、兎に角原始的なモンゴリアン型を呈するものと云える。

壯年女性の一(一〇二號)頭骨には額から耳方にかけて廣く浅い横溝がある。所謂不全周匝變形に類し、後頭にこれがないのは後年に行はれる變工に見られるところに一致する。ワイデンライヒ氏はエスキモやアイノ女子が前頭にかけて紐で物や小兒を負うのに類した風習があつて、その爲め、きつた無意識の變工で、意識的な變工の前段階と見るべきものではないかと説明している。此女頭骨は男頭骨と異なり、甚高く、過高頭な點で、過長頭にして、過高頭な

ニウカレドニア、ニウギニアなどに似ている。又後方から見ると側壁が垂直で、顛頂骨の後下部が扁たい。顔部では側面角もニウカレドニア女子と近似している。たゞこれより眼窠が低く、口部突出が弱く、第三大白歯が萌出していないためか、上顎が短く、従つて上顎齒槽示數が大きい。これに附屬するらしいが別な層にあつた大腿骨から推算した身長は一五九糎で、この點でもニウカレドニア女子に適する。マンシュイ及びコラニ兩氏報告の印度支那ラン・クオム Lang-Cuom の下部石器時代人と頭骨示數及同幅高示數では似ているが、後者の頭は狭く、眼窠高く、フロマジエ及びソーラン兩氏報告のタム・ポン Tam-Pong の中石器時代人頭骨もこれによく似ているが、少し短い。

他の女性頭骨（一〇三號）は小さく、矢狀縫合に沿つて櫛狀隆起あり、兩側顛頂上部が扁い。過長頭過高頭なることと前者と同じだが、顴弓幅が頭幅よりも大きく、頭顔示數は一〇四・六、又鼻が比轉的高く狭いこと等でエスキモに似ている。但し後者では眼窠が高いのに、この頭骨では低い。尤も山頂洞人頭骨の眼窠は孰れも高いから、特例と見られぬことはない。其他鱗狀縫合の楔狀骨部が、直線狀で顛頂骨部と直角をなしていることもエスキモに見られるところである。

以上三例の頭骨が一家族の構成員でありながら、三箇の

隔絶した地域に現生する人種の代表者の集合にも似た觀を呈することは注目すべき所見である。歐羅巴のこれと同期に相當するオベル・カツセルの男女頭骨も別な人種かと思はれる程に異つていた。併しこの三個の山頂洞人頭骨は、孰れも顔の上部低く、眼窠長方形、眼窠間隔廣く、其他鼻孔の形、その縁部の形構、鼻前溝、口吻突出等多くの點で一致し、同一系族に屬することは疑いない。尙前記の如く第二の女頭骨には矢狀櫛があり、男頭骨の下顎骨には下顎逆起あり、齒冠髓腔が大きく、所謂牛齒性を示す等シナントロプスに見らるゝ特徴を有するものがあり、後者の後裔でないと思ふことはできないか、古代に溯る程人種が純粹になると思ふのが常識のようになってゐるのに反して、山頂洞人は人種複合にも似た不純觀を呈するのである。一般に云われる人種なるものは基本人種でなく、それから分化偏倚した特殊形である。基本人種と思われるシナントロプスとピテカントロプスとでさへも、相似點と相違點とを有し、截然區別されるわけではない。山頂洞人の不純觀は將來分化してできる亞型人種 Sub-race に相當する人種素子 race-elements が顯われているのに因るものと解釋されるのである。

山頂洞人頭骨は孰れも長頭で、現生北支那人の如く、頭高く短く、顔長く狭きものはない。ワイデンライヒ氏は後

者に相當するものは山頂洞人に敵意を抱き、迫害を加えた同期人として、別に棲存したことを想像している。當然そのあるべきで、私も中國人や日本人は斯る末期最新人類から分化したのであるかと考へる。最新世人類は一般に長頭だが、中には短頭のものもある。クラピナなどにもその例があり、又マダラグレニアンよりは後のアジリアン・タルデノアジアン文化に屬するオフネットでもかゝる例が見られた。山頂洞人と同じ末期最新世人類にこれ程頭の長くない亞型人種があつたことを想像するは故あることなのである。

一〇 シナントロプスと漢民族

シナントロプスが人類と稱し得る最低限に近き原始的形態を有することは上述によつて略ぼ了解されたと信ずる。従つてこれと漢民族との間に緊密な緣故關係が存在しようなどとは想像し得ないのである。シナントロプスが進化してホモ・ソロエンジス、更に山頂洞人に類する程度に咀嚼器の強大性が失われれば獨り漢民族のみならず、其他の亞細亞諸民族との懸隔が削減するにしても、それが特に漢民族との緣故を強調し得る傾向に進展せるものとは臆斷されない。併し身體標徴のうちには比較的外界の影響を蒙ることの少ないものがある。例えばシャベル形門齒、下顎隆起の如

きこれである。ワイデンライヒ氏はこれらの變異がシナントロプスに見られることが多く、しかも歐羅巴人には稀れなのに、エスキモ、アメリカインデアン、北支那人等の所謂モンゴル系人種に多いことから、シナントロプスと現生人類中特に支那人即ち漢民族との間に緣故關係があるといふ臆説を持している。

シャベル形門齒とは上の門齒の齒冠の舌面がその兩側縁部の膨隆してゐる爲めに、シャベルのように凹んで見えるものをいうのである。この兩側縁の隆起に伴つて、基部にもシャベルの柄の部分のように、一つの結節があり、これが少しく上方に伸びて消失し、或は左右に岐れて、兩側縁の隆起と吻合する。かゝるシャベル形門齒が特にエスキモ、アメリカインデアン、支那人等の蒙古系人種に多く見られることを注意したのはヘリチカ氏（一九二〇）である。側縁の隆起程度に強弱はあるが、上記諸人種頭骨では上の第一及び第二門齒共に、その著明なものが過半を占め、隆起の全くないことは稀なのに、アメリカの白人及び黑人には隆起のあるものが稀れで、その缺如する例が過半を占めてゐる。日本人にもシャベル形門齒を有するものが多く、殊に石器時代人に著しいことは注意に値する。然るにシナントロプスの門齒は、齒冠でも根でも、北支那人のより遙に大きい、シャベル形を呈する點では蒙古系人種に一致し、

基底結節も著しく、その上方に伸びた部分は指のように數條に岐れて消失し或は側縁の隆起に達する。此の基底結節はネアンデルタール、クラピナ、エーリングスドルフ等の原始人類ではシナントロプスよりも強くできていたので、その上方で齒冠の舌面に小窩が見られるが、側縁の隆起は弱く、この點では歐羅巴人に類するものがある。基底結節は類人猿では著明でなく、黑猩猩では側縁の隆起と連なつて中央の凹窩を圍み、シャベル形を呈する。猿猴類でもこれに類し、基底結節が強くない。即ち基底結節の特化はシナントロプスに始まり、ネアンデルタールになつて一層甚しくなつたと云える。シナントロプス及び蒙古系人種で側縁の隆起の強いのも、これと同様な特化現象と看做すべきもので、種々の點でシナントロプスとは別な先行人類の系統に屬すと思われる歐羅巴のネアンデルタール系人類で側縁の隆起が弱いということは興味深い所見である。ピテカントロプス及びその系統に屬すと思はれるホモ・ソロエンジスの門齒に就いては此點尙不明だが、ワインデライヒ氏がシャベル形門齒を共有する事實によつてシナントロプスと漢民族との緣故關係を認めんとするのは故あることのように思われる。

下顎隆起はやくよりオスチャク、ラップ、エスキモ等の下顎骨に就いて記載された變異形像で、この名稱もフェ

ルスト氏(一九〇八)がエスキモの下顎骨を調査したときに提唱されたのである。即ち齒槽部内面に見られる圓形乃至卵形の低い隆起で、大き大豆位に達することがある。第一小白齒と第二小白齒との間にあるものが多く、且つ大きく、これより前方各齒間に相當しても見られるが、第一門齒に近づくほど稀に且つ小さい。後方第二小白齒と第一大白齒との間に在ることもある。それより後方には稀れである。但し大白齒部の齒槽部面には斯く限局性でなく細い皺のような隆起が前上方より後下方に向つて斜めに列んでいることがある。ワイデンライヒ氏によるとシナントロプス *GI HI* には前者、*AI HIV* には後者の著明な例が見られた。類人猿のうちチンパンジー及びゴリラには線條形の隆起があるのを常とするが、限局性のものは極めて弱いものが狸々で見られただけである。然るにエスキモでは諸報告を通じて下顎隆起の認められる例は七〇%前後、オスチャク及びラップではこれより少いが約三〇—五〇、アイノで三〇、支那人及び日本人では一五—三〇%位で、即ち蒙古型諸人種に多く見られる。又わが石器時代人では大正九年(一九二〇)私が國府人骨に見られることを報じた後、清野、宮本、金高諸氏によると津雲、國府、吉胡等出土下顎骨では五〇—七〇%の多きに達するということ、必ずしも孰れの遺跡の人骨に就いても斯く多いというわけではないが、

現代日本人より、總數としても、著明な例としても、多いようである。下顎隆起の成因に就いては種々の説があり、エスキモの如き革細工など、齒でくわえて革紐をしめるなど、咀嚼以外にも多く齒を利用する例があることを擧げて、機械的刺戟によるという説が道理らしく聞えた時代もあつたが、同じラップの中でも住地によつて多寡に著しい差異のある例などもある。遂にヴィタミン缺乏症と關係があると、いう説なども出た。ワイデンライヒ氏は人類進化の途上、もと遙に強厚であつた齒槽部が衰退する間に残された支柱と見做すべきであろうと述べているが、これでも物足りない節がある。私の考へでは小白齒の部位に多く、その前後になると激減する事實は永久小白齒の萌出が遅いこと、關係があるらしく見える。その遅れている部分にも略ぼ同等量の骨質が配給蓄積され、永久小白齒の萌出により、齒槽壁が完成しても、壓力の少い場所に過剰骨質が停滞して、結節状を呈し、斯る隆起ができるのではないかと想像する。併しそこには遺傳關係が大きな役割をするであろうことは勿論である。従つてワイデンライヒ氏が下顎隆起をシナントロプスと支那人との緣故を反映する一證左とするのは一應理由のあることを認めてよいと思われる。尙蒙古系人種など、という場合の蒙古は實は支那人を意味し、今日の蒙古人を指すのではない。又下顎隆起が却つて支那人に比較的

少ないからといつてシナントロプスとこれとの關係が他の蒙古系諸人種より薄いと解釋するのは後に述べるように、早計といふべきである。アイノを蒙古系に加へることに異論があるだろうが、チユクチ其他の北方民族と密接な關係があることから見ても敢て不當ではない。彼等が日本を経由して北海道に達したといふ舊時の臆説こそ根據薄弱なことを思い合わすべきである。其他アイスランド人に下顎隆起が甚だ多いという事實からも蒙古系人種に特有だとすることに異議が出ているが、歐羅巴に短頭種の人類が出現した歴史は甚だ古いから、強ち蒙古系に無關係だとは云えないようである。

シャベル形門齒及び下顎隆起のほか、ワイデンライヒ氏は後頭骨上葉の骨核の獨立によつて出現するインカ骨がシナントロプス後頭骨四例中三例あることや、頭骨天頂が龍骨狀に隆起することなどもかゝる例證に數えているが、これらは氏自身も甚有力とは考えていないようである。

シナントロプスは最新世前期に北支那に棲息した人類であり、これと現代北支那人との中間に位すべき古人類としては、これまでに山頂洞人が知られただけである。併しピテカントロプスに次ぐ、ホモ、ソロエンジスの如き、最新世中期の人類が將來發見される可能性は大にある。この階級を経て山頂洞人になつたとすれば、後者と同時代にこれ

とは少しく異つた身性の人類が棲息したことも考慮に入れることができるわけで、ワイデンライヒ氏が山頂洞人に多く非業の死を遂げた形跡の認められることを説いたのも、

斯る人類の實在を想像するからである。シナントロプスの頭骨は小さく、且つ長頭であり、其他種々の特徴で、大に現代支那人と異なつている上に、山頂洞人の頭骨も亦同様に著しくこれと異なることは前に述べた通りである。山頂洞人中男性頭骨は鼻骨凹陷、顴骨直立且つ前方に向い、鼻前窩を有し、上顎の齒槽前方に突出する等の點で、歐羅巴古石器時代末期の人類やワヂャク、タルガイ等の古アウストラリア人と目せらるゝものと異なり、原始的な蒙古系人と認むべきものである。併しこれと現代北支那人頭骨とを比較すると、後者が高く、短く、且つ顔が長く、狭いことだけでも著しい相違が認められる。この差異は山頂洞人の如き段階から、更に進化したとなれば、幾分削減されることはあり得べきで、例へば咀嚼器が強大にならぬとき、見かけの頭長がその大きさを減じて、短頭に近づき、且つ脳頭骨が高さを増大するに適し、顔の幅が減じ、且つ高くもなるであろうが、差異が大きすぎて、それだけで山頂洞人から現代北支那人を誘導しようなど企てるのが餘りにも無理なことは云うまでもない。併し彼等とは少しく異つた最新世末期人類が別にあつたとすれば、かゝる假想も可能にな

るわけで、シナントロプスと現代支那人との連鎖と認めていふような最新世中期乃至末期人類遺残の發見が大いに待望されるわけである。

そこで注意して置きたいのは、從來古きに溯るほど、人種が純粹になるように考へてゐたことが妥當でないと言ふ點である。斯る考へ方からすると、同じく蒙古系人種であると云いながら、下顎隆起が支那人には比較的少い。故にこれが蒙古系人種に特有だとするのは謬だといふ批難も成立するわけである。併しシナントロプス及びピテカントロプスの如き先行人類になると變異も少いが、既にネアンデルタール級の原始人類では變異が漸く目立ち、山頂洞人の如き最新世末期人類ではこれが一層甚しく、同じ家族に屬しながら、一は蒙古型、一はエスキモ型、一はメラネシア型と云うべき程に異なつてゐる。これは分化の傾向が漸く顯著になつただけで、孰れが純粹型であり、他が不純型だと解釋すべきものではないのである。同じく支那のうちでも、北部、中部、南部の住民は夫々異なつてゐるが、その孰れが純粹型であり、他は不純型だと云ふこともできない。亞細亞の諸民族乃至人種が種々の點で相貌が異なつてゐるからとて、これらをすべて混血の結果でもあるように考へるのは、すべて太古に若干の純粹な人種があつたといふ謬見から出發するのである。眞の漢民族といふべき體型を具

えたものは支那のどの地方に見られるかなど、というのはかかる見地からすれば一つの愚問に過ぎない。日本人を混血民族であるというなどもこの類で、人類の進化は他の哺乳動物には見られない現象で文化の發達とその原動力を同じうし、人類自身の努力工夫によつて達成されて來たことを

思うべきである。これからは遺傳と環境の影響といううちに人類自身乃至民族自身の行動が體型を變化させる重要な因子として含まれていることを充分念頭に於て考へる必要が大いにある。

鎌倉書房

—— 書 圖 係 關 史 歷 ——

柳田國男著 家

閑

談

て、民俗學の父祖柳田先生が語るその變遷と傳統、日本社會究明の根本課題はこれだ。八十圓送十圓

慶大教授 松本信廣著 日本神話の研究

日本神話の成立は、南東アジアの民俗的宗教的背景を措いては考へられない。本書はかかる觀點から豐玉姬傳説その他の日本神話を考察した。九十圓送十圓。

文學博士 橋本増吉著 中國古代文化史研究一

東洋史學の耆宿として、橋本先生の存在は世界的な重みを

持つ。本書は有名な古田制考その他中國古代に關する論究を收めて學界に送るもの。五十圓送十圓。

展望廣く視角新しき八幡氏の學風は世の齊しく認めるところ。

八幡一郎著 日本石器時代文化

國民必讀の書だ。六十圓送十圓。曾つて中國にあつてシナント

赤堀英三著 原人の發見

ロプスの國際的研究陣に參畫した著者の最新の資料と學說に基く興味津々たる展望と解説。鮮麗圖版豊富挿入。近日刊行豫定。